

令和 2 年 7 月 13 日現在

機関番号：12603

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K21020

研究課題名(和文) 社会主義ユーゴスラヴィアにおける多民族空間の形成および崩壊とナショナリズム

研究課題名(英文) Role of Nationalism in the Formation and Collapse of Socialist Yugoslavia's Multinational Society

研究代表者

鈴木 健太 (SUZUKI, Kenta)

東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・研究員

研究者番号：00749062

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、20世紀の社会主義ユーゴスラヴィア(1945-1991年)をとり上げ、多民族的な社会におけるナショナリズムの機能を再検討し、その新たな視座の探究を試みた。具体的には、(1)多民族社会の形成と実践はナショナリズムの是認を前提としたこと、(2)ナショナリズムの政治的レトリックとしての作用、(3)統一的なユーゴスラヴィア主義とナショナリズムの相互関係、(4)多民族社会の崩壊とナショナリズムの急進化の様相を明らかにした。これにより、多民族国家の形成から実践、そして崩壊のいずれの局面にも結びついたナショナリズムの両義的な側面を捉え、国家の存続時代を通してその動態を理解する視点を示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

社会主義ユーゴスラヴィアのナショナリズムは、従来の研究では、最終的な国家解体やその後の戦争に対する着目から、連邦国家の統合を危うくする原理や現象として考えられることが多い。本研究は、解体過程に議論を留めるのではなく、国家の形成からの連続性のなかでナショナリズムの機能を検討した。これにより、統一国家の前提であり、同時に国家の崩壊因子でもあったナショナリズムの両義的な側面を捉え、国家の存続時代を通してその動態を示すことができた。またそうした歴史研究に基づく成果から、現代のナショナリズムをめぐる諸問題の多面的な理解や議論の豊潤化に向けて、他地域とも比較可能な視座を提示することができたと考えられる。

研究成果の概要(英文)： This research project reexamined the role of nationalism in the multinational society of the Socialist Federal Republic of Yugoslavia (1945-1991). Nationalism in a federal state tends to be regarded as what can endanger its integrity, much like the Yugoslav breakup in the 1990s. This study attempted to grasp the ambivalent aspects of nationalism that were related to the Yugoslav multinational experiences (positive and negative)--from the society's formation through its maintenance and eventual collapse--and endeavored to understand the dynamism throughout the period of the state's existence. These concepts were explored through the following four main points: 1) nationalism was the presupposition for building and maintaining a multinational society; 2) nationalism was the foundation of the rhetoric for political and economic needs; 3) unitary Yugoslavism embraced nationalism of each nation; and 4) nationalism grew and became more radicalized as the country neared collapse.

研究分野：ユーゴスラヴィア現代史

キーワード：ユーゴスラヴィア 民族 ナショナリズム 多民族 現代史 社会主義 連邦

1. 研究開始当初の背景

ナショナリズム、また民族/国民をめぐる問題は、これまで種々の学問分野で議論されてきた。しかし、ナショナリズムに関連する事象は極めて多様であり、理論面のみならず、当該地域の政治や社会の文脈を踏まえた実証的な検討が不可欠である。

そのなかでヨーロッパ東部やバルカンの地域は、ナショナリズムの表出や民族間の緊張が顕著な地域として扱われてきた。当地の「民族問題」を所与のものとし、歴史的な対立を自明視する見方も少なくない。その反面、対立が生成される具体的な過程や個々のメカニズムの検討は弱く、議論が多面的、動態的な視座に欠ける傾向がある。

こうした問題意識のもと、本研究代表者は、社会主義ユーゴスラヴィアの解体や同時代のセルビア共和国を主たる対象に、体制危機に伴う社会変動や民衆運動に着目しながら、当時の政治過程におけるナショナリズムの意味や役割を考察してきた。だが、国家の崩壊過程に即した検討のみでは議論の範囲が狭く、それに先立つ時代とも関連づけながら、社会主義ユーゴスラヴィアが存続した時代全体を通じて考察に取り組む必要性を感じるようになった。

2. 研究の目的

本研究は、20世紀の社会主義ユーゴスラヴィア(1945-1991年)を題材に、その多民族空間を構成する政治と社会の諸関係のなかで、ナショナリズムがどのように機能していたかを再検討するものである。

社会主義ユーゴスラヴィアは、世界的に見ても、またヨーロッパ東部地域やバルカンにおいても、多民族的な社会の形成と崩壊の双方をとりわけ顕著な形で経験した事例のひとつである。統一国家をめぐる生じたそのような異なるベクトルの力学にナショナリズムがどのような役割を果たしたのか。この点について、体制内でのナショナリズムに関する「認められる/認められない」という相反する二側面に着目しつつ、個々の具体的な検討課題(A)~(D)('3. 研究の方法」参照)に即して明らかにした。

その際、最終的な国家の解体に議論を留めるのではなく、ナショナリズムが体制の前提を成した点についても考察を深めながら、ナショナリズムがもち得たその両義的な側面を、国家の存続時代を通じた連続性とその歴史的経験のなかで検証することを試みた。これにより、当該地域の社会とナショナリズムの関係をより多面的かつ動的に理解する視座を提示することをめざした。

3. 研究の方法

このような大枠の目的のもと、本研究を遂行するにあたり、次の4つの具体的な検討課題を設定した。

(A) 多民族空間の形成・実践とナショナリズム

戦後の連邦国家の建設は、民族自決が根拠となり、個々の民族体や共和国の政治的単位を制度化することによって成立した。多民族国家の制度設計、その実践の過程に寄与したナショナリズムの影響を考察する。

(B) 政治的レトリックとしてのナショナリズム

ユーゴスラヴィアにおいてナショナリズムは、反体制の概念である一方、各民族が自決を前提に自らの利害を代弁するための政治的レトリックとしても機能した。そうした役割について、当時の多民族的な政治文化を把握しながら、個別事例をもとに検討する。

(C) ユーゴスラヴィア主義とナショナリズム

統一的なユーゴスラヴィア主義と各民族のナショナリズムは、しばしば対抗関係で捉えられがちであるが、当時の体制において、前者は後者を部分的に包摂するものでもあった。ユーゴスラヴィア主義を再検討し、ナショナリズムとの関係を検証する。

(D) 多民族社会の崩壊/破壊とナショナリズム

1980年代末から90年代初頭に至る国家解体の過程において、ユーゴスラヴィア主義や多民族社会を支持する勢力が周縁化されるとともに、個々のナショナリズムが多民族性と切り離され、もっぱら独自路線や独立を肯定する概念に変容していく様相を明らかにする。

以上の(A)~(D)を土台に、本研究は主として、歴史研究に立脚した地域研究に基づいて進められた。それぞれの具体的な検討課題では、史資料を収集し、それらを同時代の文脈のもとに分析・考察し、実証することが中心的な作業となった。4年の研究期間において、基本的には各年度1つの具体的な検討課題に取り組み、最終年度に総合的考察を行うことを計画した。研究の推進にあたっては、現地諸機関での史資料の調査・収集を精力的に進め、海外研究者との意見交換・交流を効果的に活用した。

4. 研究成果

初年度にあたる 2016 年度は、(1) 研究着手に伴う基礎的な作業にあたるとともに、(2) 具体的な検討課題(A)「多民族空間の形成・実践とナショナリズム」および(D)「多民族社会の崩壊 / 破壊とナショナリズム」の分析・検討に取り組んだ。

(1)に関しては、先行研究や関連二次文献の調査と収集、また政治史の整理を行いつつ、本研究における(A)～(D)の具体的な検討課題の精緻化を進めた。その際、ヨーロッパの 20 世紀史のより広い文脈や他地域との比較の視点を参照し〔その成果の一部が『東欧史研究』39 の書評〕、研究の枠組みや問題関心の改善・拡充を図った。

(2)では、(A)の課題について、事実関係および多民族国家の制度設計に関する整理と分析を中心に考察を進めた。一方、(D)に関しては、当初の計画を前倒しする形で、重点的に取り組んだ。まず、1980 年代末のセルビアとスロヴェニアにおける大衆運動の展開を比較検討し、多民族社会の崩壊を控えた時代において、極端なナショナリズムが自制されながらも、運動の拡大を通じて民族 / 共和国の一体性が強化され、民族的な政治主体が温められていく様相を明らかにした〔第 66 回日本西洋史学会大会報告〕。続いて、同時期の大衆運動をめぐる連邦党指導部の議論を分析し、統一国家の基盤であった最大の政治勢力内部に共和国間の齟齬が顕在化していく状況を示した〔特別研究員研究会報告(2016 年)、国際ワークショップ「Deconstructing and Negotiating ...」報告〕。また 1990 年前後のスロヴェニアを事例に、ナショナリズムが排他性を強めて急進化し、独立を後押ししていった過程について考察を進めた〔その成果の一部が『スロヴェニアを知るための 60 章』所収の論考〕。

2 年目の 2017 年度は、主として、(1) 具体的な検討課題(C)「ユーゴスラヴィア主義とナショナリズム」および(D)「多民族社会の崩壊 / 破壊とナショナリズム」の分析・検討に取り組んだ。またあわせて、(2) 本研究の関連する時代・地域についてより広い視座と文脈を参照し、獲得する作業にあたった。

(1)では、(C)の課題のもと、ユーゴスラヴィア主義の当時の体制下における位置づけ、またナショナリズムとの関係について検討を行った。ユーゴスラヴィア主義を象徴し、統一国家の最たるスローガンをなした「友愛と統一」概念の制度的な構成を把握するとともに、民族 / 共和国ごとに整備された国内の歴史研究におけるユーゴスラヴィア主義や、歴史を対象とした唯一の全国的な学術雑誌の役割について考察した〔その成果の一部が「社会主義期東欧ロシアの歴史学」成果報告書所収の論考〕。一方、前年度に実施した(D)の課題の継続的な成果として、国家の崩壊に連なる 1980 年代末の政治変動とナショナリズムの連関について、1988 年のセルビアおよびヴォイヴォディナの諸集会から分析する作業を進めた〔主な結果が『スラヴ研究』論文、ならびに特別研究員研究会報告(2018 年)、仙台中東欧研究会報告〕。ここでは、大衆運動の進展にとってナショナリズムは中心的ではなかったものの、運動におけるナショナリズムの位置づけ自体が争点となり、連邦党指導部内の対立が生み出された点を明らかにした。

(2)に関しては、東中欧・バルカン地域の近現代史における移動の視点、「バルカン」の地域概念の再考などを通して、本研究に取り組む上での幅広い視角や問題意識の拡充と底上げを図った〔東欧史研究会 2017 年度第 3 回例会報告および『東欧史研究』40 の書評、ワークショップ「バルカン地域研究の新展開」報告〕。

3 年目の 2018 年度は、主として、(1) 具体的な検討課題(B)「政治的レトリックとしてのナショナリズム」および(D)「多民族社会の崩壊 / 破壊とナショナリズム」の分析・検討に取り組んだ。加えて、(2) 本研究が扱う時代・地域についてのより広い視座や文脈、また比較の視点を参照し、獲得する作業にあたった。

(1)では、昨年度までの(D)の成果に基づき、社会主義ユーゴスラヴィアにおける 1989 年の諸事象を検討した。その際、大衆およびその政治運動に着目し、当時の体制において大衆の政治参加がどのような意味をもったかを踏まえつつ、1980 年代末における大衆的政治運動の勃興が、多民族社会の崩壊にいかなる影響を与え、そのなかでナショナリズムがどう関連したかを考察した〔成果の一部が特別研究員研究会報告(2019 年)〕。ここでの検討は、(B)の課題とも連動して進め、1980 年代以前の事例を含めて、大衆的政治運動とナショナリズムがどのように結びつき、政治的レトリックとして表出するかを分析した。以上により、1989 年の政治的展開において、大衆の政治参加が体制改革をめぐる共和国間の対立を増長させ、またその対立図式のなかでナショナリズムが排他的な側面を強めていく様相の一端が明らかになった〔(1)の成果の一部としてシンポジウム「歴史としての「ユーゴスラヴィア」」報告、また博士学位論文〕。

(2)に関しては、中東欧・ロシアの歴史認識をめぐる状況、ユーゴスラヴィア地域における資本主義と文化生活の関係、20 世紀の歴史学や歴史教科書の南東欧 - 東アジア間の比較などに関する様々な知見の吸収、ならびにユーゴスラヴィア建国 100 年に際した研究集会の組織化と開催を通して、本研究に取り組む上での幅広い視角や問題意識の充実化を図った〔『歴史評論』書評、共編の論集 *The 20th Century Through Historiographies and Textbooks, Acta Slavica Iaponica* 書評、シンポジウム「歴史としての「ユーゴスラヴィア」」〕。

最終年度の2019年度は、主に、(1) 具体的な検討課題(A)「多民族空間の形成・実践とナショナリズム」に取り組み、同時に、(2) 本研究課題の総括を進めた。

(1)では、初年度に行った整理・分析を引き継ぎつつ、多民族空間の制度設計とそれによって形成された社会がどのように実践、維持されたかについて検討し、その過程におけるナショナリズムの影響を考察した。その際とくに、国家の多民族性の象徴であったボスニア・ヘルツェゴヴィナに着目した〔その部分的な成果として『ボスニア・ヘルツェゴヴィナを知るための60章』所収の諸論考〕。

(2)の総括においては、まず、前年度までの、大衆的政治運動の観点から1989年の諸事象を考察した検討結果(具体的な検討課題としては(B)と(D))の一部を国際学会で発表した(「The 10th East Asian Conference on Slavic Eurasian Studies」報告)。そしてここに、(A)と(C)の課題の論点を組み込みつつ、「1989年」というひとつの結節点を通して、これまでの(A)～(D)の分析・考察がどのように相互に関連しているかを捉え、国家の解体がまさに進行する時代の視座から、多民族空間の形成・実践・崩壊とナショナリズムの関係を多面的に把握することを試みた(以上の成果の一部として『思想』論文、また『Pieria』論考)。

以上のような各年度の成果とともに、本研究では、社会主義ユーゴスラヴィアの歴史的な歩みとその連続性のなかで、ナショナリズムの機能を捉え直すことに取り組んできた。これにより、多民族社会の形成から実践、そして崩壊のいずれの局面にも結びついたナショナリズムの両義的な側面を、多面的かつ動的に理解する可能性とその意義が明らかになった。この国のナショナリズムについては、連邦解体ととくに関連づけて議論されることが多いものの、それが実際に多民族社会の存続をも左右する影響力をもち得た背景については、そうした多様な社会の形成と実践にしっかりとナショナリズムが寄与していた点からも示すことができるはずである。研究課題終了後に進める単著の執筆に向けて、十分な準備を行うことができたと言える。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計9件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 SUZUKI Kenta	4. 巻 XL
2. 論文標題 Book Review: Dijana Jelaca, Masa Kolanovic, Danijela Lugaric, eds., The Cultural Life of Capitalism in Yugoslavia: (Post)Socialism and Its Other (New York: Palgrave Macmillan, 2017), xvii+359 pp.	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Acta Slavica Iaponica (Slavic-Eurasian Research Center, Hokkaido University)	6. 最初と最後の頁 297-299
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 鈴木健太	4. 巻 12 (2020年春)
2. 論文標題 書物の喪失 かつて図書館だったサラエヴォの「市庁舎」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Pieria = ピエリア	6. 最初と最後の頁 40-41
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 鈴木健太	4. 巻 1146
2. 論文標題 ユーゴスラヴィアにおける1989年 連邦解体前夜の変革と対立	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 思想	6. 最初と最後の頁 120-139
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 鈴木健太	4. 巻 2019年2月 (No. 826)
2. 論文標題 書評 / 橋本伸也編著 『せめぎあう中東欧・ロシアの歴史認識問題』	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 歴史評論	6. 最初と最後の頁 104-108
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鈴木健太	4. 巻 -
2. 論文標題 社会主義ユーゴスラヴィア解体過程におけるナショナリズムとその諸相 セルビアの政治と社会(1987-1992年)	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 博士学位論文(東京大学大学院総合文化研究科)	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鈴木健太	4. 巻 65
2. 論文標題 1988年セルビアにおける大衆運動とナショナリズム ヴォイヴォディナの諸集会についての一考察	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 スラヴ研究	6. 最初と最後の頁 67-102
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 鈴木健太	4. 巻 -
2. 論文標題 ユーゴスラヴィア史学の試み 『ユーゴスラヴィア史学雑誌』の概観	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 科学研究費補助金(基盤研究(A))「社会主義期東欧ロシアの歴史学」成果報告書	6. 最初と最後の頁 23-31
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 鈴木健太	4. 巻 40
2. 論文標題 書評:山本明代、パプ・ノルベルト編『移動がつくる東中欧・バルカン史』(刀水書房、2017年)	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 東欧史研究	6. 最初と最後の頁 72-79
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鈴木健太	4. 巻 39
2. 論文標題 書評：マーク・マゾワー著 / 中田瑞穂・網谷龍介訳『暗黒の大陸 ヨーロッパの20世紀』（未来社、2015年）	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 東欧史研究	6. 最初と最後の頁 93-100
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計10件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 SUZUKI Kenta
2. 発表標題 "1989" in Socialist Yugoslavia: A Reassessment
3. 学会等名 The 10th East Asian Conference on Slavic Eurasian Studies (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 鈴木健太
2. 発表標題 ユーゴスラヴィアにおける「1989年」 30年後の理解と論点
3. 学会等名 特別研究員研究会（東京外国語大学海外事情研究所）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 鈴木健太
2. 発表標題 1989年の社会主義ユーゴスラヴィア 大衆的政治運動と共和国間対立
3. 学会等名 東欧史研究会主催シンポジウム「歴史としての「ユーゴスラヴィア」 建国100年の地点から振り返る」
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 鈴木健太
2. 発表標題 1980年代末の社会主義ユーゴスラヴィアにみる体制変動と対立形成 政治参加とナショナリズム
3. 学会等名 2017年度仙台中東欧研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 鈴木健太
2. 発表標題 21世紀における「バルカン」 地域をめぐる概念と認識
3. 学会等名 ワークショップ「バルカン地域研究の新展開 民族文化の越境・接触・変化をめぐる多角的研究を目指して」
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 鈴木健太
2. 発表標題 1980年代末ユーゴスラヴィア政治における対立の展開とナショナリズム セルビアとスロヴェニアの競合と急進化
3. 学会等名 特別研究員研究会（東京外国語大学海外事情研究所）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 鈴木健太
2. 発表標題 合評会：山本明代、パプ・ノルベルト編著『移動がつくる東中欧・バルカン史』刀水書房（2017年）
3. 学会等名 東欧史研究会 2017年度第3回例会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 SUZUKI Kenta
2. 発表標題 Yugoslavia and the collapse of communism in Eastern Europe: Mass movements and the intra-party confrontations in the socialist federation in late 1988
3. 学会等名 「境界地域の歴史的経験の視点から構築する新しいヨーロッパ史概念」主催国際ワークショップ「Deconstructing and Negotiating Center and Periphery in European History」(国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 鈴木健太
2. 発表標題 1980年代末ユーゴスラヴィアにおける政治社会の変動と連邦党指導部 大衆運動とナショナリズムをめぐる相違と対立
3. 学会等名 第6回特別研究員研究会(東京外国語大学海外事情研究所)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 鈴木健太
2. 発表標題 1980年代末ユーゴスラヴィアの大衆運動の展開と構図 セルビアとスロヴェニアにおける事例の比較とナショナリズムの再検討
3. 学会等名 第66回日本西洋史学会大会自由論題報告
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 柴宜弘・山崎信一編著(鈴木健太ほか25名著)	4. 発行年 2019年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 388(76-81,111-113,177-179,247-251,325-330)
3. 書名 『ボスニア・ヘルツェゴヴィナを知るための60章』(鈴木「連邦解体とボスニア紛争」、「ヤイツェ」、「アグロコメルツとフィクレト・アブディチ」、「移民・難民とディアスポラ」、「サラエヴォ五輪とその遺産」)	

1. 著者名 Zarko Lazarevic, Nobuhiro Shiba, Kenta Suzuki (eds.)	4. 発行年 2018年
2. 出版社 Institute of Contemporary History (Ljubljana)	5. 総ページ数 245
3. 書名 The 20th Century Through Historiographies and Textbooks: Chapters from Japan, East Asia, Slovenia and Southeast Europe	

1. 著者名 柴宜弘、アンドレイ・ベケシュ、山崎信一編著（鈴木健太ほか27名著）	4. 発行年 2017年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 372(77-82,206-208; 197-205)
3. 書名 『スロヴェニアを知るための60章』（鈴木「独立への過程と「十日戦争」」、「クルシュコ原子力発電所」；鈴木翻訳：「スロヴェニアの観光業」、「環境保護」）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----